



宝松江城をぐるつと囲む堀川については、以前にも書いたが、その北東に北惣門橋という木橋がある。数年前に新しくなったばかりでまだ木肌がみずみずしい。その橋を突き当たったところにあるのが松江歴史館である。松江の文化財や資料の保存、展示を目的に建てられて十年あまりになる。子どものころ、ここがどんなだったか毎日のように見ていたはずなのにまったく記憶がない。一時写真家の並河万里氏が居住していたが、ほどなく転居したと漏れ聞いた。その後のこともよくわからないが、今は瓦葺きの、高さこそないが松江城と対に置いたような重厚な建物がそこにある。

あからさまな宣伝で恐縮なのだが、三月二十三日の日曜日、ここを会場に寄席を開く。この話をもらったのは昨夏あたりだったと思うが、子どもたちに聞いたら、ほとんど全員が参加を表明した。日にちのタイミングがよかったこともあるだろうが、やはり会場に特別感があつて、ぜひともと思ったのだろう。「そんなりっぱなところでやらせてもらえるのか」と、誇らしい気がしたのではないか。

十数人で寄席となると、短めの漸でつないだとしても一時間や二時間では収まらないので、事情を話して、二部構成にしてたつぷり時間をかけさせても

らえないかと頼んだら、歴史館もどうぞどうぞという反応だった。当日は火縄銃の演武もあるので、それを間にはさむ格好で、朝席として午前十時から十一時、昼席として午後二時半から四時半、合計三時間の寄席となった。名付けて「いきいき歴史館寄席」。入場無料で、途中の出入り自由だから、都合が付くところちよつとだけでも覗いていただけたらありがたい。中はこれから考えるが、歴史館の要望で、落語、小泉八雲怪談、出雲弁落語をそれぞれ配分する。まあ、今の落語教室のフルコースである。

そこまで決めたところで安心してしまい、連絡を取ることもなく日を送っていた。それでもちよつと気の良い気もするが、年内に一度ごあいさつがてら下見しておこうかと思いついたのが十一月。メールしたら、近いうちに来いとすぐに返事があつた。館を訪ねて話をしてからというもの、にわかにことが動き始めた。ちつとも早くなかなかかつたのである。

一つには、三月二十三日で終わり、ではなく、年に三回、春夏秋冬の定席にしたい。もう一つは、稽古場として空いているときは使つてほしい、という申し出だった。願つてもない話というより、どこか話がうますぎる気がしたので、何か裏があるのでは勘ぐつた。あつた。なかなか粋な裏が。(この稿続く)

老い老いに  
木幡智恵美

18

新しい年が始まった。昨年は、元日に能登半島地震が起き、正月気分ではなくなつた。誰もが能登の人々のことを心配し、盆も正月もない自然災害の脅威に戦慄した。さらに震災の詳細が分からないまま、翌日には羽田空港で能登に向かうはずだった海上保安庁の航空機と旅客機が衝突するという、これまた背筋が凍り付くような事故が起きた。

今年はず年のようなことがない平穏な年明けではあるが、まだ復旧がままならない能登の人々は見通しの立たない不安の中で正月を迎えたことだろう。また、奇跡的というか、乗務員の確かな判断で旅客機の乗員は全員無事だったが、海上保安庁の航空機に乗つていて亡くなつた保安官たちの遺族は、いたたまれぬ思いで一月二日という日を迎えたことだろう。

さて、夕焼け通信四年目、編集長が「フィリピンのこと」、Z氏が「放浪の記」の連載中に年が改まった。この一九九七年元旦、我が家の面々七歳から七十六歳までの六人で枕木山に上がつて初日の出を拜んだ。後にも先にもこの年だけではあるが。日記にはこうある。「どうも雲が多くてうつすらと大高山頂は見えるが裾野は暗く雲に覆われた状態。大山の上の雲が面白い形を様々に見せてくれる。やがて山頂付近がオレンジ色になり、雲が少しずつ赤、橙、黄に色づいていく。寒い中、娘や息子たちと身体をすりよせながら、やつとで太陽の弧が見え凝視できないほどにまぶしくなつた時、あちこちから拍手が沸いた。」

この年の十大ニュースは以下のとおりである。一位、山一証券、拓銀など破綻相次ぎ金融システム不安頂点 二位、神戸の小学生殺人事件 十四歳少年を逮捕 三位、総会屋への利益供与で第一勧銀、四大証券首脳ら逮捕 四位、「二〇〇一年までに一府十二省庁」行革会議が最終報告 五位、消費税が五%にアップ 六位、サッカー杯初の本大会出場へ 七位、核燃料開発事業団東海事業所で爆発事故 八位、橋本改造内閣発足 佐藤孝行氏登用で支持率急降下 九位、日米防衛協力のために新指針決定 十位、ロシアのタンカーから重油流出 日本海沿岸汚染

30代フリーター 2025年は「米国第一」のトランプの返り咲きで各国の「自国第一主義」が強まりそうだ。年金生活者 一方で、流血の戦争は縮小し、無血の戦争が拡大するだろう。シリアの内戦の終わりはその走りかもしれない。トランプはウクライナとパレスチナでの流血を止めにかかる一方で、無血の対中戦争をエスカレートさせるだろう。

世界の戦争の本流は第2次世界大戦を最後に流血の戦争から無血の戦争に移った。東西冷戦はその最初の世界規模の戦争となった。ロシアのウクライナ侵略とイスラエルのガザ地区攻撃は、流血の戦争をふたたび本流に戻すかに見えた。しかし、アメリカはウクライナに対しても、イスラエルに対しても武器の援助はするものの、直接介入は避け、自らは無血の戦場にとどまった。

東西冷戦時に起きた流血の戦争が、世界規模に拡大することなく、局地戦にとどまり、やがて終結したように、ウクライナ戦争もパレスチナでの戦闘散を駆動した。それによる自らの弱体化に危機感を覚えた国家の逆襲がそのときから始まった。それが現在の「自国第一主義」につながっている。

30代 バイデンが日本製鉄によるUSスチールの買収を禁止したのも「米国第一」を感じさせる。年金 余裕のなさを露呈したこの決定はアメリカの力の衰えを示すものだ。日本の自民党は強固な後ろ盾を失ったことになり、この先もう長期安定政権を築くことはできないだろう。

現在の自民党は公明党の議席を合わせても衆院で過半数に達しない比較第1党に過ぎない。覇権国家の座からずり落ち、「比較第1位」の国に過ぎなくなった今のアメリカの地位を模写したようなポジションにある。安倍晋三の政権は自民党最後の長期安定政権として歴史に記録されるだろう。

自民党を育てたのはアメリカだ。占領軍の農地改革によって誕生した大量の自作農はこの党の支持基盤となった。占領後も駐留し続けた米軍に自国の防衛をま

も終わるときが来る。

30代 ロシアの侵略が始まったころ、それが台湾有事を誘発し、流血の戦争が拡大する可能性が語られた。年金 すぐに力尽きると思われたウクライナが徹底抗戦を続け、台湾への武力侵攻は高くつき過ぎることを中国に気づかせた。

台湾のほうも、もし中国に攻められても、アメリカは経済制裁や武器援助をするだけで直接の軍事介入はしないという予測を強め、中国を刺激し過ぎないように慎重に振る舞う必要を感じたはずだ。

無血から流血への世界史の逆転はないことが今年に明瞭になるだろう。

30代 それでも進む「自国第一主義」はいつまで続くんだ。

年金 グローバリゼーションの波に揺られどおしだった国家が世界の主役に復帰したような情景を私たちはこの先何年も見ることになるだろう。だが、この変化が周期の長い歴史の呼吸作用によるものだとすれば、やがて逆の変

かせた自民党政権は、それで浮いた費用を経済成長に注ぎ込み、企業という新たな支持基盤を手にした。

そうやって戦後日本の政治システムを支えてきたアメリカは力が衰えるにつれ、日本により負担を求めるようになった。農産品の関税引き下げを飲ませ、防衛費の増額を約束させた。服従

化がやってくるはずだ。

グローバリゼーションは東西冷戦の終結とともに顕在化した。西側の先進諸国は、冷戦に敗北した東側諸国と、すでに改革開放で資本主義化した中国の安い労働力を世界市場に導き入れるため、国境の壁を低くした。それは国家の存在理由の部分的な放棄に等しく、主権国家に代わって資本が世界の主役になったような様相を呈した。

冷戦で東側が敗北した最大の要因は、西側諸国での資本主義の高度化にある。よりこまかく言えば、消費の過剰化、産業のソフト化、資本のグローバル化だ。それらはそれぞれ自由な消費、自由な生産、自由な移動の上に成り立っている。東側の計画経済はそのいずれにも逆らうもので、西側の達成した豊かさにはるかに後れをとってしまった。

この資本主義の高度化は同時に国家の権力の分散を促した。消費の過剰化は個人への、産業のソフト化は企業（市場）への、資本のグローバル化は国連など国家間システムへの権力の分

の戻りに保護を与えてきたかつての覇権国家の姿をそこに見ることはできない。

30代 自国第一主義は国家の強権的な振る舞いを助長する恐れがある。

年金 これまで各国は資本主義の高度化とともに分散した権力を回収するために、様々な機会を利用してきた。アメリカは9・11テロを、日本は北朝鮮や中国の脅威を理由に、国家の権力の強化をはかった。ブッシュ政権は愛国者法をつくり、国家機関の権限を大幅に拡大した。安倍政権は集団的自衛権の行使の部分容認に踏み込んだ。

自国第一主義はその延長線上にある。それは対外的には国境の壁を高くすることであり、対内的には政府と国民の間の壁を高くすることを意味する。

ただし、それが一直線に進むとは限らない。壁を高くすれば、反作用も強まる。関税を上げれば返り血を浴びるのは避けられないし、国民に強権を振るえば反発を誘い出す。

ニュース日記 952  
中村 礼治

## 2025年に見えてくる景色